

第6章 フルオンライン大学の初年次教育科目 における協調学習の取り組みと効果

野木森 三和子¹, 米山 あかね²

1. 研究の背景と目的

学生が大学での学びに適応し、学習を継続していくにあたり、互いに励まし合ったり協力し合ったりしながら共に卒業を目指す仲間存在は、大きな意味を持つと思われる。個別に学習を進めることのできる eラーニングという学習形態においてもそれは例外ではなく、むしろ学生が孤独に陥りやすい学習形態だからこそ、学生同士の繋がりを形成する機会を提供し、学習意欲維持のための仕組みを整えることが一層重要であると考えられる。実際、日本の社会人学生が eラーニングにおいて学習意欲を維持するにあたり、学習者同士のインタラクションが大きな要因となっているという研究成果も報告されている¹⁾。特に、入学後なるべくモチベーションが高い初年次のうちに相互交流を促進し、大学内での人的ネットワーク形成や学習コミュニティ構築へと繋げることは、学習意欲や大学への帰属意識を高め、ドロップアウト防止の点で大きな役割を果たすものと考えられる。

現在、多くの通信制大学ではいわゆるスクーリング（対面授業）が必須となっており、その機会に学生の相互交流および対人コミュニケーション能力育成を図ることが可能である。しかし、一切の授業がインターネット上でおこなわれるフルオンライン大学においては、当然ながら相互交流やコミュニケーション能力育成の場についてもオンラインで提供し、それらを実質的に機能させるための工夫が必要となる。

もちろん、学生交流の場は学内 SNS や一般的な SNS サイト（Facebook, Twitter など）にも存在するが、そのような任意のツールは、もともと積極的な興味関心や交流意欲のある一部の学生でなければ利用しないのが実情である。そのため、コミュニケーションの苦手な学生を含む全ての学生に交流のきっかけを与え、その重要性を認識させるためには、入学者が必ず最初に履修する授業の中で課題として強制的に参加させ、同級生同士の学習コミュニティを構築させることが望ましい。

そうした問題意識のもと、筆者らの所属するサイバー大学では、初年次教育の必修科目である「スタディスキル入門」において、学生のコミュニケーション力育成を科目目標の

¹ サイバー大学 IT 総合学部・助教

² サイバー大学 IT 総合学部・助教, インストラクショナルデザイナー

一つとして位置づけ、課題設計・授業運営をおこなっている。本稿では、その授業実践を事例とし、コミュニケーション力育成を目的とした協調学習の課題において実際に学生が何を学び、どのような意義を見出しているのかについて、2012年度秋学期・2013年度春学期の各学期末に実施された科目内アンケートの結果から分析・考察をおこない、eラーニングの授業内における協調学習の在り方とその意義および今後の課題を明らかにする。

2. サイバー大学の授業内における「ディベート」

サイバー大学は、2007年に開学した株式会社立のフルオンライン大学である。入学者選抜にはオープンアドミッション方式を採っており、学生の約7割は社会人が占めている。IT総合学部では「ビジネスのわかるITエンジニア」「ITのわかるビジネスパーソン」を育成人材像として掲げ、忙しい社会人が通勤などの隙間時間を利用して「いつでもどこでも」学べる環境を提供している。

授業はMoodleをベースとした独自のクラウド型学習管理システム「Cloud Campus」を通しておこなっており、その中には、非同期型のコミュニケーションツールとして電子掲示板形式の「ディベート」機能が備わっている(図1)。ディベートはオンライン上の相互交流・協調学習の場であり、モバイル端末からでも、生体認証による学生の本人確認を経て書き込みができるように設定されている。

サイバー大学では、学生同士、あるいは教員およびティーチングアシスタント(TA)との交流や意見交換の場を確保するために、すべての科目において、授業期間を通じて少なくとも1つ以上のディベートを開設している。ディベートには、評価対象外(任意参加)のものと、評価対象として指定されているものがあり、それぞれ通称「任意ディベート」「必須ディベート」と呼ばれている。

ディベートの活用方法は科目によって様々であり、たとえば教員が授業内容に関連するテーマを設定し、それに対する意見を書かせる場合もあれば、学生同士の自己紹介や交流・情報共有の場として自由に使用させる場合もある。また、学生自身の提出物やプレゼンに対する相互講評をディベートでおこなう授業もある。時には、レポートとして個別に提出させても良いような内容の課題でも、あえて学生同士がお互いに閲覧できるディベートに書かせることによって学び合いを促すといったこともおこなわれている。

3. 「スタディスキル入門」における取り組み

3.1. サイバー大学の初年次教育科目「スタディスキル入門」

「スタディスキル入門」は、サイバー大学での学習継続に必要な4つのスキル(テクニカルスキル/アカデミックスキル/マネジメントスキル/コミュニケーションスキル)の基礎を身につけさせることを目的に、初年次必修教養科目として2012年度秋学期に新設された科目である。

第6章 フルオンライン大学の初年次教育科目における協調学習の取り組みと効果

サイバー大学
Cyber University

Cloud Campus
サイバー大学入門

あなたは福岡県としてログインしています (ログアウト)

マイホーム ▶ マイコース ▶ サイバー大学入門 ▶ 第3回 eラーニング環境と学習・教育スキル ▶ 第3回 ディベート ▶ 第3回 ディベート (eラーニング環境、学習者、教育者、学習支援者について)

科目フォーラムを検索する

第3回 ディベートです。
注意:匿名での書き込みはできません。

参加人数: 4人

返信をネスト表示する

第3回 ディベート (eラーニング環境、学習者、教育者、学習支援者について)
2012年 09月 10日 (月曜日) 20:53 - 桜華 ビルの投稿
eラーニング環境において、学習者、教育者、学習支援者に求められること(スキルや要件など)について、どれか一つ以上を選び、自分なりの意見を書いてください。また、他の学生1つ以上コメントを書いてください。活発な議論を期待しています!

Re: 第3回 ディベート (eラーニング環境、学習者、教育者、学習支援者について)
2012年 09月 10日 (月曜日) 21:18 - 岡 真子の投稿
こんにちは、1年の岡です。私はパソコンが苦手なので、eラーニング環境で学習者に求められるスキルといえば、やっぱりパソコンスキルが一番最初に頭に浮かびます。こういうところに書くのも慣れないので、いちいち手間取ってしまいます。

Re: 第3回 ディベート (eラーニング環境、学習者、教育者、学習支援者について)
2012年 09月 12日 (水曜日) 10:05 - 福岡 健の投稿
岡さんこんにちは。2年の福岡と申します。なるほど、確かにパソコンスキルは大前提ですね。とても重要な点なのに、当たり前すぎて私の考えからは抜け落ちていたことに気づかされました。
パソコンが苦手とのことですが、だんだん慣れてくると思いますから、一緒に頑張っていきましょう!

Re: 第3回 ディベート (eラーニング環境、学習者、教育者、学習支援者について)
2012年 09月 11日 (火曜日) 16:00 - 福岡 健の投稿
IT総合学部2年の福岡です。私は、eラーニングでは、通学制の大学に比べて、学習者の自己マネジメントが一層大切になるなあと感じています。授業を受ける時間、課題をやる時間を自分で決めて、それを守って学習し続けるのは結構大変ですね。教育者や学習支援者(教員やTAのことですね?)には、モチベーションを高めるような働きかけをしてもらえると助かります。やっぱり一人で孤独に取り組むのと、学習者同士で励まし合ったり、教員やTAに励ましてもらったりしながら取り組むのでは、はかどり方が全然違いますね。

Re: 第3回 ディベート (eラーニング環境、学習者、教育者、学習支援者について)
2012年 09月 11日 (火曜日) 16:04 - 香椎 麗葉の投稿
3年の香椎と申します。私は、eラーニングで一番大切なのは、コミュニケーション力だと思います。
サイバー大学に入ったばかりの頃は、eラーニングって孤独だなと思っていたのですが、最近はそうでも無いと思うようになりました。こちらが発信すれば、先生方もTAさんも、結構それに応じてくれますよね。学生同士でも盛り上がりつつあります。ディベートは、みなさんとはしゃいで楽しんでます!
ただ、直接顔を合わせることがないぶん、言葉の使い方にはいつも以上に気を付けたいと思います。

マイコース
アジアビジネス入門
サイバー大学入門

活動
テスト
リソース
科目フォーラム
科目レポート
授業コンテンツ
授業評価アンケート

設定
科目フォーラム管理
任意購読
この科目フォーラムのメール購読を解除する
投稿を未読管理しない
コース管理
マイプロフィール設定

Copyright © 2011 JAPAN CYBER EDUCATIONAL INSTITUTE, LTD. ALL RIGHTS RESERVED.

図1 ディベートのサンプル

サイバー大学の教養教育コンピテンシーとして掲げられている7項目のうちには、「意思伝達力(発信力・質問力)」「協働力(協調性・傾聴力)」「社会順応力(環境の変化に対する順応力・多様な文化に対する相互理解力)」の3つがある。「スタディスキル入門」における「コミュニケーションスキル」の育成については、これらのコンピテンシーを基礎的なレベルで満たすことを目標とし、中でも特に《オンライン授業において必要なスキル》という点に注力して、授業コンテンツおよび課題の設計をおこなった。具体的には、メール送信やディベート投稿のマナー等の基礎知識について授業コンテンツ内で説明するとともに、必須ディベートで実際に意見を書かせたり、それらの書き込みに対して相互にコメントをさせたりする課題を複数回設けている。

3.2. 「スタディスキル入門」のディベート課題

「スタディスキル入門」の授業設計にあたり、学生に身につけさせたい「オンライン授業におけるコミュニケーションスキル」の要素は図2のように整理された。

これらの要素を踏まえて、具体的な課題内容の検討をおこなった。その結果、第1回授業における必須ディベートの課題として設定したのは「サイバー大学の LMS を使用してみた感想」を書き込むというもので、まず《ディベートに自分の意見を書き込むことができる》ところまでを目的としている。

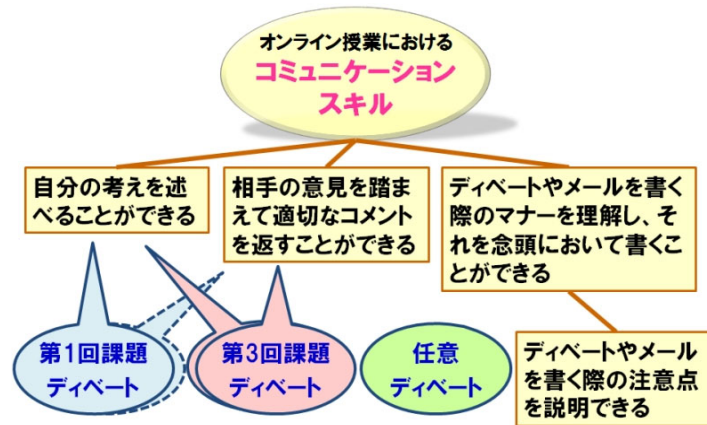


図2 「スタディスキル入門」におけるコミュニケーションスキルの育成

第3回の授業ではさらにステップアップして《相手の意見を踏まえて適切なコメントを返すことができる》ところまでを目標とし、【課題1】「サイバー大学で学び続けるための自分なりの攻略法」もしくは「卒業後の目標」について自分の考えを書き込む、および【課題2】「他の学生の書き込みに対し、コメントを書き込む」の両方をおこなうことを要件と

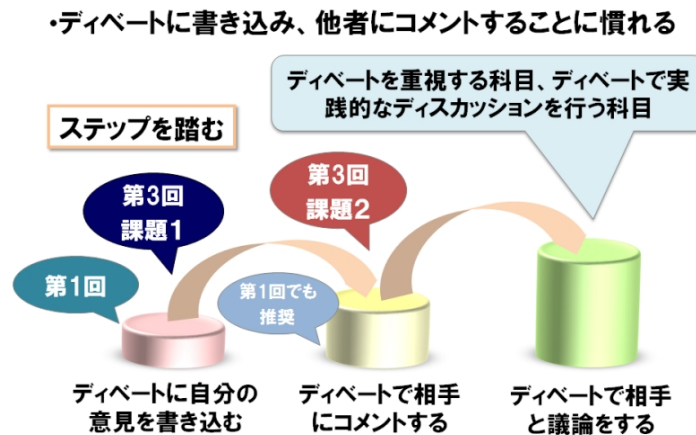


図3 「スタディスキル入門」におけるディベート課題の目的

第6章 フルオンライン大学の初年次教育科目における協調学習の取り組みと効果

した（システム上、課題1を書き込むまでは他人の書き込みを見ることができず、課題2に着手できないように設定をおこなっている）。これら2つのステップは、その後、ディベートを活用してより実践的なディスカッションをおこなう科目に取り組む際の基礎となることを想定している（図3）。

4. 授業運営の結果（2012年度秋学期・2013年度春学期）

2012年度秋学期は、履修学生数105名に対し教員+インストラクター計4名、2013年度春学期は、履修学生数266名に対し教員+インストラクター計8名（+TA4名）という体制で授業運営をおこなった²⁾。いずれの学期も、ディベートはクラスを30~40名程度ずつのグループに分け、グループごとにトピックを立てて実施した。

「スタディスキル入門」では、学期末に全科目共通で実施される授業評価アンケートとは別に、科目の学習目標に沿った学生の達成度をより詳しく把握するための科目内アンケートを実施した。全学の授業評価アンケート・科目内アンケートいずれも、最終授業回（第8回）の必須課題（小テスト）をおこなう前に必ず回答しなくてはならないものとして設置され、受講生全員が対象となっている。実際には一度も授業に出てこない学生や途中でドロップアウトする学生、第8回のみ「欠席」する学生などが未回答のままとなるため、科目内アンケートの回収率は2012年度秋学期が73.3%、2013年度秋学期は83.1%であった。全26問中17問が、主に科目内の課題や指導などについて学生自身の受講体験や感想を問う内容となっている。

4.1. 学生がディベートによる協調学習に見出した意義

図4は、科目内アンケートにおける「ディベートの相互コメントについてどう思うか（複数選択可）」という設問に対する学生の回答結果をグラフにしたものである。

このグラフからは、「新たな気づきがあり、興味深かった」「自分と同じような苦労や悩みをもっている人がいることがわかり、共感した」という形で意義を見出している学生が比較的多く見られた。ただし、残念ながら多くの学生にとって「交流が生まれるきっかけ」までには至っていなかったことも判明した。「相互コメントをする意義がわからなかった」という選択肢については、2012年度秋学期の回答結果を参考に、2013年度春学期には授業コンテンツや課題の指示において相互コメントの意義についての説明を追加したところ、数値に改善が見られている。

図4において点線枠で囲った4つのポジティブな選択肢について、それぞれを個別に見ていくと、各選択肢を選んだ学生は多くても全体の45%弱となっている。そのため、このグラフだけを一見すると「スタディスキル入門」における協調学習にポジティブな意義を見出した学生は半分以下であるように見えるが、これら4つの選択肢のうちいずれかを1つでも選んだ学生の数を集計すると、表1のようになった。これにより、2013年度春学期には、回答者全体（221名）のうち、72.4%の学生がディベート課題の実施によって何ら

かのポジティブな意義を見出していることが明らかとなった。

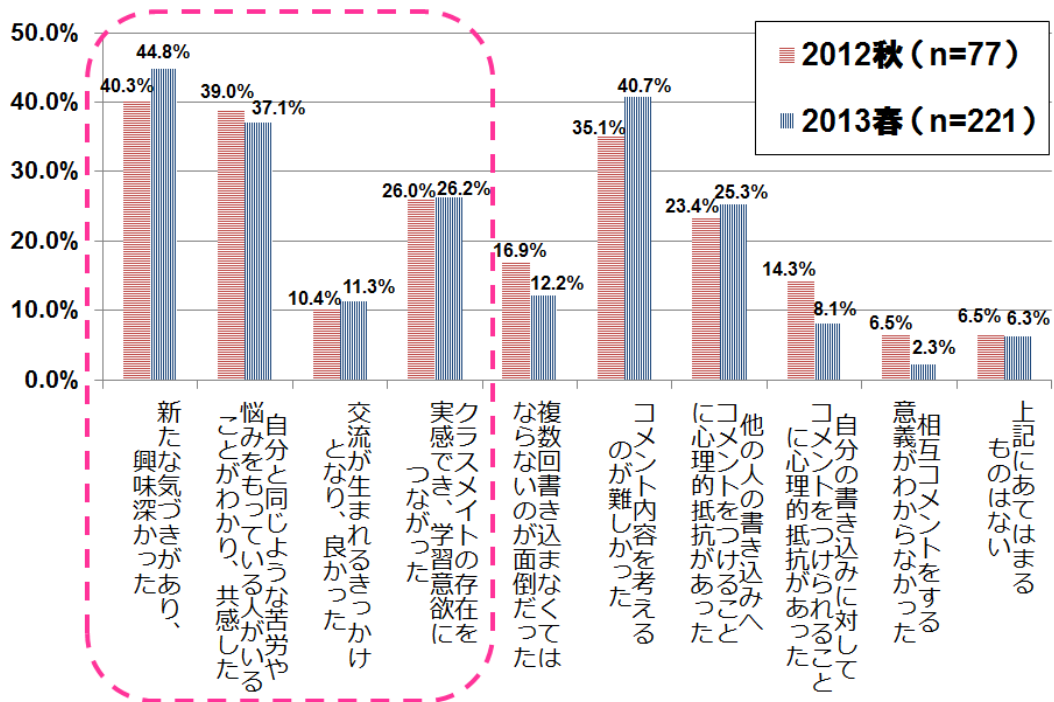


図4 デーバートの相互コメントについてどう思うか (単純集計)

表1 相互コメントに何らかの意義を見出している学生の割合

2012 秋・2013 春		Q15. デーバートの相互コメントについてどう思うか (複数回答可)		
		1つ以上のポジティブな回答もしくはポジティブなコメントあり	ポジティブな選択肢を1つも選択しておらず、ポジティブコメントもなし	計
全体	2012 秋	49 63.64%	28 36.36%	77 100%
	2013 春	160 72.40%	61 27.60%	221 100%
普段とくにディベートが苦手と答えた学生に限定	2012 秋	8 40.00%	12 60.00%	20 100%
	2013 春	58 70.73%	24 29.27%	82 100%
全課題の中で、第3回ディベート課題2が最も負担に感じた学生に限定	2012 秋	4 36.36%	7 63.64%	11 100%
	2013 春	24 63.16%	14 36.84%	38 100%

第6章 フルオンライン大学の初年次教育科目における協調学習の取り組みと効果

アンケートのフリーコメント欄にも、「同じ学生の方々の考えを知るいい機会だった」「人の目標や学習方法を知ること、自分の状況との比較ができた」「孤独に勉強するよりもコミュニケーションを通じた方が勉強意欲が増すということ」「コミュニケーションをとるのが得意ではないのでその練習になった」³⁾などのようにポジティブなコメントが多数あり、学生同士の交流には、教員や TA との交流では補完できない役割があるということが示唆された。

また、こちらも表 1 に示すように、アンケートにおいて「普段とくにディベートが苦手」と答えた学生、および「全課題の中で第 3 回ディベート課題 2 (=相互コメント) が最も負担に感じた」と答えた学生にそれぞれ限定して集計したところ、2012 年度秋学期には、ポジティブなコメントをした学生の比率が著しく低かったのに対し、課題の目的を説明する内容を授業コンテンツに追加した 2013 年度春学期では、ディベートや相互コメントが苦手な学生でも、ある程度その意義をポジティブに捉えられていることが伺えた。

4.2. 浮かび上がった課題

一方、必ずしも否定的な意味ではないにせよ、図 4 からわかるように「コメント内容を考えるのが難しかった」という意見が比較的多く見られた。関連するフリーコメントには、「実際に会ったことがない人と意見を交わすのに抵抗があった」「同じ受講生であるものの、まったく知らない方にコメントをする事に大変な気遣いを要した」などがあり、やはりオンライン特有の「顔が見えない状態」では、アイスブレイクに工夫が必要であることが伺えた。

また、たとえば「相手の現状がわからない状態で、学習方法や、卒業後の目標に、コメントをするのは難しいものがあった」「他の学生の状況が詳しく解らないのに書き込むのは無責任」といったコメントに見られるように、一部の学生は課題の内容を「相手にとって何か有益なアドバイスをしなくてはならない」と捉えていたことがわかり、そういった心理的ハードルを下げる工夫が必要であることも示唆された。

さらに、「特定の人に干渉する勇気がなかった」「他の学生について書くのは少し気が引けた。書いた後は怖くて掲示板を見ていない」「他人とのコミュニケーションが苦手な拒否感がある」といったコメントが示すように、コミュニケーションそのものに対する苦手意識を払拭できずにいる学生が一定数いることも明らかとなり、その苦手意識を授業内で克服させられるかという課題が浮かび上がった。

4.3. 改善への示唆

このように浮かび上がった課題を改善につなげるため、学生の属性など、他の項目での回答内容に照らしてクロス集計をおこなったところ、いくつかの明らかな傾向を見出すことができた。

まず、先ほどの「相互コメントについてどう思うか」という設問の各選択肢を選んだ学生について、「普段、特に苦手とする課題の形式」の回答ごとに集計をしてみたものが表 2

である。こちらからは、「コメント内容を考えるのが難しかった」「他の人の書き込みへコメントをつけることに心理的抵抗があった」という選択肢を選んだ学生には、やはり普段からディベートにもっとも苦手意識を持っている者が多いことが明らかとなった。ディベートに抵抗がある学生に対し、その心理的抵抗を低くしたり、コメント内容について自信をつけさせたりするようなアプローチを早期に実施することが、今後の課題のひとつになると考えられる。

表2 ディベートの相互コメントについてどう思うか(苦手な課題別)

12秋・13春	Q15. ディベートの相互コメントについてどう思うか(複数回答可)									
Q8. 普段、特に苦手とする課題の形式	新たな気づきがあり、興味深かった	自分と同じような苦労や悩みをもっている人がいることがわかり、共感した	交流が生まれるきっかけとなり、良かった	クラスメイトの存在を実感でき、学習意欲につながった	複数回書き込まないのが面倒だった	コメント内容を考えるのが難しかった	他の人の書き込みへコメントをつけることに心理的抵抗があった	自分の書き込みに対してコメントをつけられることに心理的抵抗があった	相互コメントをする意義がわからなかった	上記にあるものはない
ディベート(102名)	40.20%	33.33%	7.84%	20.59%	16.67%	50.98%	34.31%	10.78%	3.92%	5.88%
レポート(150名)	50.67%	40.00%	14.00%	30.00%	14.00%	37.33%	22.67%	12.00%	3.33%	5.33%
小テスト(8名)	37.50%	25.00%	12.50%	12.50%	0.00%	25.00%	12.50%	0.00%	0.00%	12.50%
特になし(38名)	26.32%	42.11%	7.89%	28.95%	5.26%	18.42%	10.53%	0.00%	2.63%	10.53%
全体(298名)	43.62%	37.58%	11.07%	26.17%	13.42%	39.26%	24.83%	9.73%	3.36%	6.38%

また、同設問の各選択肢について年齢別に回答を集計したところ、表3の通りとなり、年齢層が下がるほど、「コメント内容を考えるのが難しかった」を選んだ学生の比率が高いことが明らかとなった。24歳以下では半数以上がこの選択肢を選んでいる。これら若年層の学生については、単純に社会経験が少ないことに加え、サイバー大学の授業ではクラスメイトの大半が自分より年上で経験も豊富な社会人学生であるため、同じ水準で発言を求められることに対する不安も少なからず存在しているものと推測できる。

年齢層や職業など、多様なバックグラウンドをもつ学生が集まっているのがサイバー大学の特徴であり、そうした異なる学生同士の学びあいによって「新たな気づきがあり、興味深かった」というポジティブな実感が生まれている面もおそらくあるだろう。そのため単純にディベートを年齢層別のグループでおこなうなどの策が良いとは言えないものの、表4に示す通り、全体としてはディベートよりもレポートの方が苦手という学生が多いのに対し、若年層の多く含まれる専業学生においては、半数以上がレポートよりもディベートの方が苦手だと答えているという事実もある⁴⁾。こうした結果から、若年層の学生に対しては、少なくともコミュニケーションの取り方に関して具体的な事例を示したり、心理的抵抗を和らげるようなアドバイスをしたりするなど、社会人学生よりも手厚いサポート

第6章 フルオンライン大学の初年次教育科目における協調学習の取り組みと効果

が必要であると考えられる。

表3 ディベートの相互コメントについてどう思うか（年齢別）

12 秋・13 春	Q15. ディベートの相互コメントについてどう思うか(複数回答可)									
Q25. 年齢	新たな気づきがあり、興味深かった	自分と同じような苦勞や悩みをもっている人がいることがわかり、共感した	交流が生まれるきっかけとなり、良かった	クラスメイトの存在を実感でき、学習意欲につながった	複数回書き込まなくてはならないのが面倒だった	コメント内容を考えるのが難しかった	他の人の書き込みへコメントをつけることに心理的抵抗があった	自分の書き込みに対してコメントをつけられることに心理的抵抗があった	相互コメントをする意義がわからない	上記にあるものはない
19 歳以下 (30 名)	60.00%	26.67%	13.33%	26.67%	3.33%	53.33%	13.33%	6.67%	0.00%	0.00%
20～24 歳 (48 名)	45.83%	27.08%	10.42%	22.92%	18.75%	50.00%	27.08%	14.58%	6.25%	4.17%
24～29 歳 (34 名)	41.18%	26.47%	2.94%	17.65%	17.65%	38.24%	35.29%	11.76%	2.94%	5.88%
30～34 歳 (38 名)	50.00%	36.84%	10.53%	23.68%	18.42%	44.74%	28.95%	10.53%	5.26%	5.26%
35～39 歳 (43 名)	39.53%	39.53%	11.63%	20.93%	11.63%	32.56%	16.28%	6.98%	0.00%	11.63%
40 代 (62 名)	35.48%	45.16%	9.68%	33.87%	14.52%	30.65%	25.81%	6.45%	3.23%	11.29%
50 代以上 (27 名)	33.33%	66.67%	18.52%	44.44%	7.41%	29.63%	29.63%	14.81%	3.70%	0.00%
無回答 (16 名)	56.25%	31.25%	18.75%	12.50%	6.25%	37.50%	18.75%	6.25%	6.25%	6.25%
総計 (298 名)	43.62%	37.58%	11.07%	26.17%	13.42%	39.26%	24.83%	9.73%	3.36%	6.38%

表4 特に苦手とする課題の形式（職業別）

13 春	Q8. 普段、特に苦手とする課題の形式			
Q26. 現在の職業	ディベート	レポート	小テスト	特になし
社会人(フルタイム)(121名)	33.88%	49.59%	1.65%	14.88%
社会人(パートタイム、アルバイト)(34名)	44.12%	47.06%	0.00%	8.82%
専業学生(25名)	52.00%	28.00%	12.00%	8.00%
専業主婦/専業主夫(3名)	0.00%	66.67%	0.00%	33.33%
その他(26名)	34.62%	50.00%	3.85%	11.54%
無回答(12名)	33.33%	58.33%	0.00%	8.33%
総計(221名)	37.10%	47.51%	2.71%	12.67%

一方、再び表3を見ると、年齢層が高くなるほど、「自分と同じような苦勞や悩みをもっている人がいることがわかり、共感した」や「クラスメイトの存在を実感でき、学習意欲につながった」という回答を選んでいる学生が多いことがわかる。年齢層の高い学生の学習意欲維持を考える上では、クラスメイトとのつながりを持てるような工夫・支援が非常

に重要な要素であると言えるだろう。

このように、eラーニングにおける協調学習の効果を今後一層高めるためには、学生の属性による傾向なども踏まえ、どのような層にどのような指導・支援が必要なのかを考えながら、適切な働きかけをしていくことが望まれる。

4.4. 相互コメント必須化の意義

「ディベートに書き込む」「他人のコメントに返信させる」ことをあえて初年次教育科目における必須課題とすることについて、最後に一言触れておきたい。先に述べた通りサイバー大学のディベートには「必須ディベート」と「任意ディベート」があり、少なくとも「任意ディベート」は各科目に1つは必ず用意されている。しかし、科目内のみならず学内や学外に交流の場をいくら設けようと、それが「任意」である限り、普段から交流の苦手な学生は進んで参加しようとはせず、教員が「相互交流によって多くのことを学んでほしい」あるいは「コミュニケーションスキルを身につけてほしい」と思うような学生は、まず自主的には参加してくれない。そのような学生のみならず、ほとんどの学生は基本的に成績に直結する最低限の活動しか実施しない傾向にあり、特に働きかけをしなければ、進んで交流や議論をしようとする学生は、元々交流好きなごく一部の学生のみとなる。

実際、2012年度秋学期、2013年度春学期の「スタディスキル入門」においても、任意ディベートの参加率は、それぞれ10.4%、1.9%に過ぎなかった。フルオンライン大学において「意思伝達力」「協働力」「社会順応力」などの能力を十分身につけさせるためには、初年次必修科目の必須課題において学生が少しでも協調学習に何らかのポジティブな意義を見出すことができるように工夫し、他科目における協調学習の機会を学生自身が積極的に活用していくような姿勢の育成が不可欠であろう。

今回は「スタディスキル入門」の科目内のみにおける考察であったが、「スタディスキル入門」を受講した学生がその後の受講科目においてどのような学習態度や学習成果をみせているかについても、今後調査研究を重ねたいと考えている。

5. まとめと今後の課題

2012年度秋学期および2013年度春学期の授業運営を経て、各学期末に実施した科目アンケートの結果について分析をおこなったところ、受講者の約7割が、ディベートでの相互コメントに「新たな気づきがあり、興味深かった」「自分と同じような苦労や悩みをもっている人がいることがわかり、共感した」「クラスメイトの存在を実感でき、学習意欲につながった」など、何らかのポジティブな意義を見出していることが明らかとなった。普段ディベート課題を苦手と感じている学生に限っても7割近くが何らかのポジティブな経験を得たと回答していることは、あくまで必須課題として授業内にコミュニケーションの機会を位置づけておくことの重要性を裏付けるものである。また、その回答や書き込みの内容からは、学生同士のコミュニケーションに、教員やメンター⁵⁾との交流では補完できな

第6章 フルオンライン大学の初年次教育科目における協調学習の取り組みと効果

い重要な役割があることも伺えた。

一方、アンケートにおいて、当科目の良かった点として、「クラスメイトと交流できた」を選択した学生がごく僅かであったことや、ディベートでの相互コメントについて「交流が生まれるきっかけとなり、良かった」を選択した学生が少なかったこと、および任意ディベート参加者が依然として少ないことを考えると、残念ながら、学生が当科目の受講をきっかけに学内で持続的な交流を開始するところまで至っているとは言い難い。限られた授業期間の中で、継続的な学習コミュニティ構築を目的とした交流機会を提供するための方法、およびその機会の活用を促進するための方法については、引き続き検討が必要である。こうした課題には、今回の分析により浮かび上がってきた学生の属性による傾向やコミュニケーションに対するハードルの所在などを踏まえ、教員、ティーチングアシスタント、ラーニングアドバイザー、学生サポートセンタースタッフなどが連携して取り組んでいくことが望ましいと考える。

注および参考文献

- 1) 菊池 尚代, 'Motivation in E-learning for Adult Learners : A Japanese Context,' 『国際基督教大学学報』, I-A, 教育研究 48, 2006年3月, pp.203-215
- 2) インストラクターは、通常の科目に配置される TA (ティーチングアシスタント) とは異なり、教員と同様に評価や指導をおこなうスタッフである。また、通常、TA は指導補助者として主に学生の学習サポートにあたるスタッフであるが、2013年度春学期の「スタディスキル入門」に関しては、TA は表に出ず、主にレポートの1次採点のみをおこなった。
- 3) 以降すべての抜粋コメントは2012年度秋学期または2013年度春学期の科目内アンケート自由記述欄、または課題ディベートにおける書き込みより引用。
- 4) 2012年度秋学期については専業学生の母数が少ない(5名のみ)のため、表4に関しては2013年度春学期のみのデータ。以降の学期においても同様の傾向があるのか、偶然2013年度春学期の学生のみ傾向であるかは継続して調査が必要である。
- 5) メンターは、eラーニングにおける学習支援スタッフの総称。サイバー大学では主に TA (ティーチングアシスタント)、LA (ラーニングアドバイザー) がメンターとしての役割を担っている。

本稿は、2013年9月21日に日本教育工学会第29回全国大会にて筆者が行った発表「フルオンライン大学の授業における学生相互交流の在り方と意義」の内容をまとめたものである。

